

研究ノート

アウグスティヌス『三位一体論』に於る三一性

小 浜 善 信

I はたらき operatio には二種が区別される。一は、はたらく者のうちに止まるもの、他は、はたらく者から外へ出るものである。神に於てもこの二種のはたらきが見られる。一が神の内への発出であり、他が神の外への発出即ち創造⁽¹⁾である。では神の内への発出とは如何なるものか。御父なる神が即自 An sich として、御子なる神として外化し対自 Für sich となり、この両者から聖霊なる神が発出しこれが両者を結合して、ここに即且対自 An und Für sich としての三位一体なる神 Deus Trinitas 即ち一にして三、三にして一なる唯一神が現出する。

此様な三位一体なる神によって万物は創造される。果は因を多様な仕方で反映するから、被造物のうちには三位一体なる神の様々の類像 similitudo が見い出される。アウグスティヌスは特に〈精神〉mens のうちに見い出される類像を〈神の似像〉imago Dei と呼ぶ⁽²⁾。即自 an sich としての精神が認識 notitia を発出して対自 für sich となり、この両者を愛 amor が結合してここに即且対自 an und für sich の精神 mens trinitas が現出する。即ち〈精神・自己認識・自己愛〉という三一性 trinitas が見い出される。精神とその自己認識・自己愛との関係は、基体と偶有との関係でもなく、全体と部分との関係でもなく、三つの実体の混合による一つの実体の存立というでもない。これら三肢は関係という観点から区別され、実体的に一なるもの⁽³⁾である。

しかし此様な精神の三一性は抽象的原理論⁽⁴⁾である。我々の精神は具体的なはたらきをなしている。それ故我々は〈精神・自己認識・自己愛〉を〈記憶・認識・意志〉という三一性に換言する。何故精神が記憶に、愛が意志に換言され得るのか。先づ精神が記憶に換言され得るアウグスティヌスの根拠を見よう。アウグスティヌスは早くから記憶に就て関心を寄せ、回心(386年)翌年の『魂の大きさに就て』に於て

は魂 anima の力の無量性を明らかにするために記憶の問題に言及し、次で『音楽論』に於ては numerus (リズム・ハーモニー・数) の種類とその序列を論じる第六巻で、感覚的なリズムの他に確実に不変の numerus 例えば詩作術や数学で言う numerus も魂 (但しこの場合 mens) 或いは記憶のうちにあるという⁽⁵⁾。更に親友ネブリディウスへの 389 年の返信に於てもほぼ『音楽論』と同様の記憶論を述べている。しかし「告白」第十巻に於てその記憶論は独自性と詳細さに於て飛躍的な展開を見せている。そこで彼は可感的・物的なものから得たその似像及びこの再生像である phantasma そして学——これらの記憶の他に、魂としての自己の記憶と神の記憶を論じている。アウグスティヌスは記憶を世界と自己と神と——凡そ存在するものすべてが何らかの形でそこに見い出される〈場〉として把握する。『告白』第十巻は極めて注意深く順序立てて述べられている。先づ感覚を通じての似像の記憶、次にそれらを判断する学の諸規則の記憶、そして判断に於てなした魂自身の行為の記憶即ち自己自身の記憶に就て述べるという順序になっている。自分の行為に於てもった感情は知標として記憶のうちにある。又忘却そのものも記憶は保っている⁽⁶⁾。記憶を記憶する場合には、記憶そのものがそれ自体によって記憶それ自身に現在する⁽⁷⁾。ここで言う記憶は、感覚・想像・判断・行為・感情——要するに体験全体の直観的記憶のことである。そしてこのような記憶の観点が『三位一体論』にも受け継がれたものとしてそれを我々は〈精神〉と換言する⁽⁸⁾。

次に何故又如何なる意味で愛が意志に換言され得るのか。『三位一体論』第十巻に述べられる〈記憶・認識・意志〉という三一性は再び同第十四巻に於て論じられる。そこで彼はこの三一性を自然的自己の〈記憶・認識・愛〉と呼んでいる⁽⁹⁾。第十巻の三一性はこのような三一性であったのである。自然的とは、意識されようがされまいが、人間が人間として存在する限り如何にしても失うことのできない——人間存在そのものを根底から成立せしめる規定として具わっているということである⁽¹⁰⁾。そして彼がここで〈意志〉を〈愛〉 amor と言い換えていることに注意しなければならない。意志はつねにその向うべき対象をもたねばならず、それを求めている限りに於て欲求 appetitus と言われ、それを得ている限りに於て愛と言われる⁽¹¹⁾。〈意志〉という規定は現実的なはたらきの一般的規定であり、精神の自己意志は既にその対象 (自己) をつねに得ているのであるから〈愛〉と言われる⁽¹²⁾。

かくて即自としての記憶が全体として完全に外化して認識を生み対自となり、自己記憶と自己認識とを自己愛が結合してここに即且対自の精神の三一的構造が現出する。⁽¹⁵⁾自己記憶・自己認識・自己愛の三肢は、一つの生、一つの精神、一つの実体である限りに於て一である。これに対しそれらが相互に関係づけられる限りに於て三である。

ところで以上の三一性は精神の直観的自己認識に関するものである。しかし人間の<魂>と言われる生命は、決して確実に誤りなき直観的自己認識によってのみ生きているのではない。人間の魂はつねに肉体と結びついている。精神は比量的判断・想像・感覚の諸能力とつねに結びついてはたらいっている。このような人間の魂のうちには、神の似像とは言われないがしかし神の似像の反照とでも言われるべき他の類像が見られる。⁽¹⁶⁾如何なるものか。先ず前述の記憶論で可感的イマゴ・ファンタスマの他に学或いは永遠不変の概念 *rationes* の記憶もあると言われた。然るに『三位一体論』では、この永遠不変の概念は我々のうちにあるというより寧ろ我々（の精神）⁽¹⁷⁾を超えていると言われる。而もそうでありながら我々は何らかの仕方によって物的なものに就て判断するのである。このような *rationes* の内在と超越は如何なる関係にあるのか。我々は精神の全体的直観的自己認識の構造性格と反省的・形相的認識のそれとを明確に区別しなければならない。前者に於ては、認識の主体も対象も同一のもの即ち自己である。自己が自己を超越したりすることはありえない。ところが後者に於ては成程認識主体は精神であるが、判断されるもの及び判断がそれに基づいてなされるところの *rationes* と精神とは別のものである。別のものである限りに於て精神は判断の際自己から出て自己を判断の対象へ向け同時に判断の根拠へ向けねばならない。精神のこの両者へのこの超越に於て判断が成り立つ。而も判断は他ならぬ我々のもとの (*apud nos*) なされる。こうして我々は精神或いは魂の自己超越に於て可感的イマゴ・ファンタスマを自己のうちに取り込み、それに就て判断する *rationes* を我々のうちに現象させる。即ち魂の自己超越以前に於ては我々を超えて隠れていた *rationes* が我々のうちへ明るみへ出される。謂わば内なる内から、そこに於て即自にあったものが対自に置き戻される。⁽¹⁸⁾魂はこういうものの現象する場でもある。『三位一体論』で精神を超えている (*supra mentem humanam*) と言われた *rationes* は、この *rationes* の我々のもとへの生起現象に於

てそれを成立せしめる〈根拠〉である。現象してきた即ち記憶の野に現われ出てきた rationes 〈概念〉或いは学はそこから消失し得る。しかし根拠としての rationes そのものは精神を超えて不変に止まる。こうして我々は神の似像の反照とでも言われるべき類像を判断のうちに見出す。即ち魂のうちに現象しそこに刻まれた概念の記憶を即自とし、それを謂わば〈親〉とする〈子〉として外化し対自化する学的規則 disciplina、両者を結合する意志、これら三者によって成る或る種の三一性を見出す。しかしこの場合の三一性に見られる即且対自的構造に於ては、精神の直観的自己認識の場合と違い、対自は即自の完全な外化とは言われずどこまでも即自のままのものが残される。何故なら判断者の目は一度にすべてのものを判断することはできず、つねに比量的でなければならず、こうして時間的規定を受けねばならぬからである。完全な対自として外化しないということから又この三一性は神の似像ではない。

次に、人間の魂のこの比量的判断は物的・可感的なものに就てなされるが、可感的事物に就て直接関わるのではなくて想像作用 imaginatio によって媒介されねばならぬ。感覚を通じて取り込まれるイマゴは想像を媒介として判断へと引き取られる。この想像能力は単に再生能力に限定されない。媒介能力としてそれは判断能力と無関係ではないということが指摘されねばならない。動物の想像能力も人間のそれも共に感覚能力の受働作用の浸透を受けている。この限りに於て想像能力を見る限りそれは全く受動的なものに止まる能力でしかないだろう。しかし人間の想像能力はそれに尽きるものではなく、同時に上位の能力即ち判断能力の規制浸透を受けている。ここから人間の想像能力は感覚の受働作用と判断の規制作用の協働する〈場〉として特有な性格をもつに至る。アウグスティヌスは前述の判断の行われる〈場〉を固有には mens と呼ぶのに対し、このような想像能力を遂行する〈魂〉を固有には animus という言葉で表現する⁽¹⁹⁾。従って想像能力の特有な性格は又 animus と言われる〈魂〉の性格でもある。この能力の特有な性格とは、その対象——感覚を通じて取り込まれたイマゴを保持し続ける作用ばかりでなく、分離・結合・統一する作用、その対象へ向い超えようとする超越作用をもつということである⁽²⁰⁾。この性格は又意志のそれでもあり、animus とは一言で言って意志的側面を濃厚にもった〈魂〉と言いうるだろうし、我々の意志の特性は想像力に於て余すところなくそ

の姿を露顕する。このような人間特有の性格をもつ想像に於て我々は或る類像を見出すことができる。即ち感覚を通じて取り込まれたイマゴの貯えられている記憶を即自として、それを謂わば<親>とする<子>として外化し対自化した内的まなざし (visio interior) 両者を結合する意志——これら三者によって成る即且対自的な三一性である。こういう三一的構造に於て我々が通常<想像する>というはたらきは成立している。これら三肢は成程一つの魂に属するものとして見い出されはする。しかし明らかにイマゴと魂とは別のものであり、又判断の場合と同様、内的まなざしは決してこの記憶に含まれる全体を一挙に見ることはできず時間的規定のうちで移ろいゆかねばならないから、即自はどこまでも即自のままのものを残し完全な自己外化の姿で対自になることはなく、その三一性は何らかの類像ではあるにしても神の似像とは言われない。

人間の想像能力は上記の様に判断能力の能働規制浸透を受け独自の作用性格をもつ。しかし逆に、想像能力である限り判断へイマゴを媒介する性格をもつものとしてどこまでも又感覚の受働作用の浸透を受けている。この感覚は肉官とも呼ばれ、
 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100
 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200
 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250
 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300
 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350
 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400
 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450
 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500
 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550
 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600
 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650
 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700
 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750
 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800
 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850
 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900
 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950
 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000

他方我々は又どこまでも人間の能力の範囲を逸脱する世界の存在、即ち神によって創られそれ自体で存立する物的事物の存在を認めない訳にはいかないのであって、この世界自体は我々の能力によって産出されるものではない。そしてこのような存在によって感覚は何らかの仕方で触発受働作用を受けるのであり、この時我々は物的事物、まなざし、志向の三者による三一的類像を見出す。

II 人間の<魂>と言われるものは感覚・想像・判断の諸能力の協働に於て一つの生命を構成している。感覚に於る三一性、想像に於ける三一性——これらは現実には純粋に独立に成り立つものではなく、つねに魂全体の諸能力の協働に於て成り立つものである。想像といってもそれは既に感覚の触発を通じて物的なものイマゴが魂のうちに取り込まれるのでなければ働かない。即ち可感的事物による感覚の触発を通じて成立する<物的事物・外的まなざし・志向>或いは<感覚のうちにある物的事物のイマゴ・まなざし・意志の志向>という三一性に於て取り込まれる物的事物のイマゴが、想像に於て成り立つべき三一性の第一肢即ち(感覚的)記憶の位置に措かれ、こうして<記憶・内的まなざし・意志>という三一的構造が生じる。この想像を媒介として、感覚に於て取り込まれたものが判断の対象になる。想像に於て保持されるものが判断の三一性の第一肢即ち概念の記憶に包摂され、こうして<概念の記憶・学的規則・意志>という三一的構造が生じる。想像は感覚を、判断は想像を従って感覚をも前提してはじめて成り立つのである。しかし逆に、判断能力の想像能力への浸透、想像能力の感覚能力への浸透ということが言われうるのであり、我々が<感覚する>というときにすら想像能力・判断能力が何らかの仕方で協働していると言われるだろう。少くももの言ひ語らう人間に於ては純粋に感覚するということは考えられないのではなからうか。このような謂わば下からの受働作用と上からの能働作用とが渾然一体分ち難く協働して、ここに我々が<魂>と呼ぶものの全体的機能が果されている。

人間は純粋に直観的自己認識に於て生きているのではなく、つねに同時に魂の他の諸能力との協働に於て生きている。さればこそ又通常この直観的自己認識は隠されたままである。即ち魂の能力は先ず感覚を可感的事物によって触発されるのでなければならず、こうして取り込まれるイマゴが想像作用に託され、ここに媒介され

たものに就て判断し、或る者は自己の魂をこのイゴマと混同し、魂をすら物的な何ものかであると見做すという誤謬⁽²¹⁾に陥る。人間の魂はその機能を果すために先づ以て物的なものによって触発されねばならぬという宿命のために、不斷に物的なものへと自己超越せねばならぬ。こうして人間は次第に自己忘却へと陥ってゆく。〈汝自身を知れ〉と言われるとき、この自己忘却からの脱却が命じられているのである。アウグスティヌスは〈外から内へ〉という自省の道によって自己自身に到達する。そしてこの自己自身が上記の三一的構造に於て存し、これは仮令意識されなかったとしても我々の存在のはじめよりして我々の根底に具わっていたものである。しかしアウグスティヌスの場合、この〈自分自身を知る〉ということは単に精神の直観的自己認識をもつということに尽きるのではなく、宇宙に於ける人間存在の定位の自覚をも含意する⁽²²⁾。即ち自己が下屬すべきもの（神）の下に、自己が支配すべきもの（物的世界）の上に、規定されることを欲するという意志規定も含意する。精神は自己を物的なものと思ひ込み自己忘却に陥る傾向性をもつ。このような自己忘却を脱却しても、しかし神を忘れるならばより以上の自己忘却に陥るだろう。従って〈記憶・認識・意志〉という精神の自己自身の三一性が神の似像と言われうるのは、それが今言った宇宙に於ける人間存在の定位の自覚に於て成り立つ可能性をもつものだからである⁽²³⁾。しかし又もし精神が神を愛する可能性をもったまま現実に神を愛するのでなければ決してその三一性すら真実には三位一体なる神の似像とは言われないだろう。従って真に神の似像と言われる三一性は〈記憶・認識・愛〉に於て見出しされる。但しここで言う〈愛〉は固有には dilectio のことである。アウグスティヌスは〈愛〉を表わすものとして先程の amor の他にこの dilectio そして charitas という言葉を使う。amor は広義の概念で、物的なものへの愛、自己愛、神の愛、これらの孰れにも使う。しかし固有には、物的なものへの愛、そしてその限りでの愛及び単なる自己愛を彼は cupiditas と呼び、神の愛を dilectio 或いは charitas と呼ぶ⁽²⁴⁾。『三位一体論』第九巻・第十巻に述べられる三一性の〈愛〉amor はどこまでも自己愛に止まるもの、しかしまたどこまでも神への愛の可能性をもったものとして考えられる。そして現実に神を愛するときに〈記憶・認識・愛(dilectio)〉という神の似像たる三一性が見出しされるのである。アウグスティヌスが第十四巻に於て精神の三一性に関して〈memoria・intelligentia・voluntas・

sive amor, vel dilectio> という表現をするとき、⁽²⁵⁾ 以上のような観点が予想されているであろう。<sive>, <vel> は単なる言い換えではない。意志は対象をもち、その可能対象は物的なもの、自己、神である。その可能対象をもちうるものとして意志は又愛 (amor) とも言われよう。しかし既に神を現実に愛しはじめたときに意志は固有には dilectio と言われるのである。神の愛の可能性をもったものとして <memoria · intelligentia · voluntas · sive amor> という三一性も神の似像と言われうる。しかしこの神の愛はどこまでも可能性でありその意味で即自的であり、全体としてこの三一性は即自的である。アウグスティヌスが nosse の段階での意識に於ける精神の三一性を論じるときこのような即自的なものが考えられており、そしてその愛の対象は専ら自己であり、cogitare の段階での意識に於る三一性を論じるとき <memoria · intelligentia · dilectio> という謂わば対自的・自覚的なものが考えられており、その愛の対象は専ら神である。⁽²⁶⁾ ここで言う対自的とは、既に宇宙に於ける自己の定位を自覚して生きる意識のことである。そしてこの限りで即ち神のために物的なものを、自己を愛するならばその愛も決して cupiditas とは言われない。

しかしこの <対自> もまだ完全なものとは言われないだろう。何故なら、この定位の自覚のうちには又人間は「我は在りて在るもの」と言う無制約的創造者によって創られたものであること、正にそれ故に制約された存在しかもたず、存在そのものである神とは存在上の無限の距離をもつこと、このような自覚が含意され、従ってこの自覚は、不断に神への自己超出を続け自己を創造してゆくダイナミックな運動に於て深められてゆかねばならないからである。

註

- (1) *De Trin.* V, 13, 14 (2) *ibid.* IX, 12, 18.
 (3) *ibid.* IX, 4, 5~5, 8
 (4) *ibid.* IX, 2, 2. Auferamus enim ab hac consideratione caetera quae multa sunt, quibus homo constat: atque ut haec quae nunc requirimus, quantum in his rebus possumus, liquido reperiamus, de sola mente tractemus.
 (5) *De quantitate animae*, 5, 8
 (6) *De musica*, VI, 4, 6~7, 18; VI, 18, 34
 (7) *Confessiones* X, 13, 10

- (8) 感情の記憶 *ibid.* X, 17, 26. 忘却の記憶 *ibid.* X, 16, 24~25
- (9) *ibid.* X, 15, 23~16, 24
- (10) アウグスティヌスはこの換言に就てただ青年の能力を検べる場合に普通これ
を検べるからとしか言っていない。しかし我々はその換言の根拠をこのように
解する。
- (11) *De Trin.* XIV, 14, 19, non tamen in his tantis infirmitatis et erroris malis
amittere potuit naturalem memoriam, intellectum, et amorem sui.
- (12) *ibid.* XIV, 4, 6. 及び前註参照。
- (13) *ibid.* X, 10, 13.
- (14) *ibid.* IX, 9, 14; IX 12, 18
- (15) 三肢の作用性格は順に、自己保持, 自己意識, 自己統一作用として規定され
うるだろう。
- (16) *ibid.* XI~XII, 3.3
- (17) *ibid.* VIII, 9, 13; IX, 6, 10; XII, 2, 2
- (18) *Confessiones*, X, 10, 17~11, 18
- (19) しかし想像能力のうちでは感覚の受働作用と判断の能働規制作用とが協働す
るから、その両作用を担う *animus* のうちで判断が行われると考えられること
もある。ここから学的規則の所在を時に *animus* であるとするアウグスティヌ
スの思想が理解される。一般に彼は *anima*, *animus*, *mens* 更には *cor*, *spiritus*
など人間の内面を表わす言葉を無差別に使っているのではない。それらは固有
の意味と重複する意味をもっている。それが如何なるものか明らかにしうるが
機会を改める。
- (20) 統一性 *Confessiones*, X, 8, 13; 持続性 *ibid.* X, 8, 14; X, 13, 20; X, 25, 36; 自
発性 *ibid.* X, 8, 12~18 特に X, 19, 28 の想起に就て; 超越性 *ibid.* X, 25, 36
- (21) *ibid.* X, 7, 9~8, 11
- (22) *ibid.* X, 5, 7
- (23) 註 (11) (12) 参照。
- (24) *De Trin.* IX, 7, 13
- (25) *ibid.* XIV, 12, 10
- (26) *ibid.* X, 5, 7; XII, 5, 7